

ダブルフェイス

エイリアンは風人

MADSEN KIKO
マドセン紀子

青山ライフ出版

エイリアンは風人（ダブルフェイス） ☆ 目次

(1) エイリアンを見てしもうたがね。

(2) そこにいたんかね？探したわ。

(3) 夢人？風人？ってナン、何？

(4) 高い所は、マジ、あかんで。

(5) お棺の中はドエライ（ものすゞぐ）せまいがね。

(6) エイリアン虫達は、ナン、ナン？

(7) 大ガラス姫はギリギリ？

49

36

32

27

19

12

4



- (8) マジ? 大ガラス姫はヤバイ?.....
- (9) ドナが大ガラスになつた.....
- (10) キノコ頭のエイリアン?.....
- (11) ナルコレブジーって、ナン? ナン?.....
- (12) フタリ以上の私?.....
- (13) 憲依つて ナン、ナン?.....
- (14) 最後に變つて、ナン、何?.....

135 120 116 106 90 66 51



(1) エイリアンを見てしもうたがね。

突然ですが、「貴方、エイリアン、宇宙人にあつた事があるか?」と聞かれたら、即座に「ハイ、勿論。」と答える。誰に何と言われようと「ある。」のです。「どこで?」と余りにも昔の話なので記憶の糸をたどる必要がありますから少しお待ちを。「ウーン。目が私を見つめている。二つ目ではありません。ヒエツ、光る二つ目の上にも、もう一つ。」「ウーン、オ、オシッコを漏らした、お、お母さん。」と私。母も何かを感じているのか、それとも見てしまったのか閉じた目と手が震えている。暗闇の中で母の微動だしない小さくて丸い身体が「ハア、ハアー。」と乱れた呼吸をしている。それを機敏に感じ取る私の身体と心。「恐い。」父は今夜もない。多分、夜の繁華街を彷徨い、吠えているのだろう。まったく、訳の分からぬ男、オヤジだ。父は自分の家族を守り切れないだろう。多分、一生!何かを父が守れるとしたら自分だけだろう。一生!私は、この光る青いヒカリ目を見ながら確信した。この際、父の事なぞどうでもいいが、「どうしよう、逃げたい。」心の中の私が叫ぶ。「でも、母は?赤ちゃんは?こ

の二人は逃げ切れるだろうか？」 多分、無理。 そおつと、薄目を開けて光る青めをみた。「ヒエツツ。」 一回じや動搖が抑えられないで、「ヒエー。」 三つ目が巨大化している。まるで小さな満月。 そして、その三つの満月目が青、黄、赤、金、銀と：いや、も、もつと有つたかも？ 兎に角、ゴーンと渦巻、ひ、ひ、光輝き、あ、頭がグル、グルちぎれんばかりに回つてゐる。「ド、ド、ドゥシヨウ。」 と声に出して叫んでしまつた。母も「ワアーアー。」 と私よりも「アーッ」と立てない。 い声で叫び続けてゐる。こ、腰が抜けて一人とも立てない。母が弟を抱えながら尺取虫みたいに、こ、腰で歩いてゐる。私は、其の後を四つん這いになつて追いかけた。た、立てない。この際、腰でも腹でもお尻でも何でもいい。この場から逃げ出せれば。こんな状況の中ですが少し補足させて頂きます。私達一家は、関市という昔は、將軍に献上していた刀剣等で有名な村（今は町）からほんの一ヶ月前に岐阜市に出て來たばかりです。父は岐阜師範を出た後、現在の筑波大学院に行く夢を家の諸事情により叶わず中学の数学教師となり母と縁あつてお見合い結婚をして私達が生まれました。ある日、父は突然、母に何の断りなく教師を辞め、何を思つたか市会議員のそれも、某革新党に立候補して又、又、夢破れ自暴自棄になつて飲んだくれ、母を泣かせていました。（母の三姉妹と母方の祖母と母の兄嫁のお話より）今は、起業して、一応、社長だが余り軌道に乗つていない。だから、家族がエイリアンに連れ去られるかいなかの瀬戸際に飲んだくれてゐる父。飲んだくれてゐる男？と聞くと皆さん何だか屈強な良く

☆☆ (1)エイリアンを見てしまふたがね。

らニコニコしている。でも、前より、妙に大きくなっている。「ヒエー。」いつたい、昨日から何回叫んでいるのでしょうか？おまけに、オ、オ、オデコに、変なデキモノが出来ていて、「ソ、ソーッとそれに触ると、ウ、動いて這い出すて弟のフサフサした黒い髪の中に消えた。「ヒエー、これが、真実だと見なかつた事に仕様。」と固く自分の恐怖に震え怯えてる心に誓つた。その後、下の弟が産まれましたが、オデコに出来物は何歳になつてもできなかつた。ホツと安堵した。だが、三つ目が頭に入った上の弟は幼稚園に入るまで、鉄人28号（漫画の主人公）とだけ話し、自分で28号になりきつて答えていた。ただ、幼稚園になると一人遊びが少くなり、特に母は本当に安堵していた。ただ、まだ、五歳だというのに大人の立ち振る舞いをする様になつた。そして、美形になつた。今は見る影もなくなつたが、見目、形だけではなく、何というか、妖氣？というか、いつも弟の周りを白い霞がかつた物が漂つていた。よく、映画やUFO見ました番組で見た人が白い、霧のようなもやの様な中から現れたとか、強い光線とか、と答えてる前者、キリ、モヤが弟の身体をほんわり包んでいる。大人になればなるほど私達三人の顔立ちは何故だか、とても兄弟には見えなくなつていつた。そして、上の弟は、年と共にモテまくつたが、高校時代の初恋の相手以外に愛したのは悲しいかな私の大親友だけで、彼女が弟を裏切つて乗馬学校で知り合つた金持ちの男性と結婚して、三人の子供が出来たと伝えて何も言わず寂しく笑つていた。未だ、独り身だ。相手なんかその時の彼の美

貌をもつて口説けば1秒で墮ちる。でも、女性を落とす前に自分が大親友のメギツネ（ゴメン）に落ちに墮ちて呼吸さえも出来なくなっている。母は下の弟、父は自分の次に上の弟を溺愛した。ここが大切ですよ、いいですか、あくまでも自分の次です。私は長女と言う事もあって、早くから親離れせざるを得ない状況下にあつた。別に寂しくない。どちらかと言うとその方が動きやすく身も心も軽くていい。身勝手な父とは違う愛情あふれる身軽さが好きだ。身軽さは心地よい。私には、空気を吸う位必要な者だ。ただ、皮肉な事に、溺愛された弟たちは、相手を我を忘れて溺愛しすぎ、身軽に育った私が人から溺愛される事の多い人生となつた。教訓1、余りにも度を過ぎた愛は身を滅ぼす。前例1、我が上の弟。（下の弟は、幸い？恋が実つて、完全にお嫁さんのケツに敷かれて頭も禿げた。）私は、この頃、人生で初めて輪廻転生なる物を経験している。私は、信心深い方だがそういう事を今まで余り信じていなかつた。別にエイリアンを見たからではない。自分の内なる信念、いや、そんな、オーバーなことじゃない。つまり、それまでは、そういう世界とは無縁だったからだ。マア、そんなにも確固たる真実を持つてゐる訳では有りませんので安心して下さい。話は、輪廻転生？みたいな感じですが、有る天国一月の天国一日のほんやりした日にボウーと天国から下界の人間界を見渡すと色白の青年が見事に実った柿の木の下で薪を割つてゐる。その隣で、ベティさんみたいな感じの小柄の日本人には珍しい茶髪の梅花も恥じらうような初々しさが溢れ出している女の人が西日を

☆☆ (1) エイリアンを見てしまふたがね。

浴びながら、彼を手助けして、割られた薪を几帳面に並べている。その白い白い小さな彼女の手をよく見るとあかぎれで腫れている。痛々しい。「何かキュウーンと胸を打つこの痛みは何なん。」と思つた瞬間、「マツ逆さまにデザイア。」と下界に舞いながら落ちて、墮ちて行つた所までは覚えているんやけど。気が付くと、誰かが、私の顔をシゲシゲと覗き込んでいる。「本当に賢そうな子やねえ。」とか、「目がまだ、見えとらんに、わっち（私）の顔、見とらつせる。」とか、「お父さんに、そつくりやわ。」とか言つてゐる。村人達が私が生まれたので、見に来たみたいだ。田舎は、良いにつけ、悪いにつけ、人がワサワサと集まる。でも、誰も母に似てゐるとは言わなかつた。「でも、ええ。私は私やわ。」と心の声が村人達に叫んだ時から、僅か0歳にして、私は両親から巣立つた様な氣がする。

確かに、8歳の時に大病をした。私は、殆ど父方の血筋を引いていたが、身体が弱いことだけ、どうも、母方の血筋を引いていたらしい。ともかく、この病気を境に全てが変つた。大病を患うまで、村人達から振動？いや、神童と呼ばれていた、この私が病気を境にすっかり普通の子供になつてしまつた。父は、どんな試験でも100点しか認めなかつたし、運動会でも、1等しか順位を認めなかつた。別に不満はなかつた。それが当たり前だと思つていた。母がある日、私に言つた。「イブちゃん、普通がええがね。そんな、頑張らんでええ。」「えつ、何で？」と私は母の目をまつすぐ見て聞いた。母は一言「死んでまう。（舞う？）」といつた。「エツツ？」

と耳を疑つたが即座に納得した。私は、父方の炎火ごときの激しい気性と母方の愛の為なら死んでも見を削る（ウーンと後から気づいたのですが、死んでも身をもつて愛を守る方が激しく怖い気性だという事に）と言う献身性の両面を受け継ぎその二面性に苦しんでいた上に、エイリアンを見たせいで？人が言う「超天然」。だから、この忠告とも諦めとも思える言葉を大事に今日まで何とか生きてきたが、この日から「努力」と言う尊い言葉は殆ど私の脳裏から消えた。話は又、チヨー純粹な弟の恋愛に戻りますが、小さい頃から、「なんて、ええ、男や。」とか「顔もええけど、頭も気性もええ。」とか言われてええ、ええ、ずくしで育った弟はこの日を境に見事に消えた。別に死んだ訳ではない。つまり、今までより、影がうすく、僕く、つまり、今までとは全く違う人生を、フワフワと何とかソーソーと一歩ずつ歩き始めた。メギツネは子供達と金持ちの夫と偽りの光の中を洋々と歩き続け、弟は生氣を無くしてこの世とは違う見知らぬ世を歩きはじめた。そもそも、このメギツネは女子校時代の大親友だった。高校1年の時、席が隣同士になり、ナントなく気があって3年間ズートいつも、一緒にいた。彼女と日舞クラブで舞を習い二人で舞う時はいつも、私が男役。彼女はいつも元気で、舞の他にお茶、お花を習い、家では、社交ダンスにピアノと英会話など、などと、御両親からお嬢様の英才教育を受けていた。おまけに、敬虔なクリスチヤンだと思ったが弟にした仕打ちを考えるに怪しい。キツネは私が付けたニックネームで「もう、イブつたら」と言いながら気にいつていたみたい

☆☆ (1)エイリアンを見てしまふたがね。

だ。お返しに私には「ゴリ」と言う立派なニックネームを頂戴した。喧嘩したときは、このあだ名をお互いに連発しあつた。

そんな、楽しい彼女との想い出も弟と彼女との恋愛沙汰でふつ飛んだ。精気のない身体で見知らぬ世をボウーと歩き続けていた弟に「あんた、本当にたわけやねー。」とハッパをかけても、何を言つても静かに悲しそうに笑うだけだ。しかし、こんなに女人を愛せる男を生涯一度も見たことがない私のほうがたわけ（岐阜弁でおバカ）かもしだれない。それも、よりもよつて我が弟とは、本当に笑えない。

(2) そこにいたんかね？探したわ。

或る日、このコロナ禍の中、どこかで、聞いた様な懐かしい歌声が風に乗って流れてきた。その歌声は私に話かけているようだ。耳を澄ましてその歌声を聞いた。その時、何かが私のオデコを隅から隅まで這いずつている様なイヤーな気がした。「ウソ、まさかあの時、そう、エ、エイリアンを見たあの世、いや、あの夜？」「わ、私のオデコにも潜り込んでいたのか？」「油断も隙もないやつらめー。」と心の声が喋りまくったが、時、既におそし。それでも、心の声を振り切り「か、か、鏡。」とマジで叫び、鏡に恐る恐るオデコを写してみた。オ、オ、オデコの中で青白く光るあの世、いや、あの夜の目、目が私をジーッと、み、見てる。その目を睨み返したとき「アチ、アチ、熱い。」身体中が突然、炎に焼かれた様に熱い。長い黒髪が逆立つてきた。あの夜の母みたいに。「ヒエー、どうしたらええんやろ。」と思つた瞬間、お城らしき建物の大きな部屋に、一人立つ、大きな背丈の侍と向き合つていた。その、この世の男とは思えぬ美しい侍の目からは、血の様な涙が出ている。それだけでも、ワナワナ震えているのに血